様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ００６４２

研究課題名（和文）公共用語の発展的理論と実証調査

研究課題名（英文）Developmental Theory and Empirical Investigation of Public Language

研究代表者
井上　史雄（Inoue, Fumio）

東京外国語大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：４００１１３３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：Covid-19のコロナ禍により、学会出張を利用した打合せ会や、現地調査がほぼ不可能になったが、それまでに入手していたデータの分析と論文の執筆に集中できた。ことに山形県鶴岡市の江戸時代の方言集『浜荻』所載語形の追跡調査の分析が大幅に進んだ。250年前の江戸言葉との対比を、現状と比べることにより、近代の公共場面における標準語・共通語が、どのように成立し普及したかを、精細に知ることができた。また、共同研究者により、関連する諸現象についても、着実な成果を上げることができた。具体的には、分担者による各種の実証研究を研究業績一覧によって参照されたい。今後も分析を続け、成果を公開していく予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、公共用語という新しい視点を導入した。公共用語とは、公共場面で使われる言語を指す。研究開始当時は先行研究も少なかったが、その後高校の新科目に「公共」が登場し、確固とした位置づけを受けた。公共用語は、標準語・共通語と同様の視点であるが、外国語を考慮に入れ、かつ言語行動をも含む点、現実の使用を考察する点、および従来の方言学・社会言語学と違い、上Highの場面の使用から照射する点で、新しい。近代の公共場面における標準語が、どのように成立し普及したかを、精細に知ることができた。結果はCDによる方言地図などの形で公開するとともに、多数の研究論文で発表し、講演や新聞などでも周知を図った。

研究成果の概要（英文）：The Covid-19 coronal disaster made it almost impossible for us to hold meetings or conduct field research during our conference trips, but we were able to concentrate on analyzing the data we had obtained and writing papers. In particular, we were able to make significant progress in our analysis of the word forms in the Hamaogi glossary of Edo period dialects from Tsuruoka City, Yamagata Prefecture. We were able to compare the Edo dialects 250 years ago with the current situation, and learn in detail how the standard and common language was established and spread in modern public situations. In addition, the joint researchers were able to make steady progress on various related phenomena. For details, please refer to the list of research achievements for the various empirical studies conducted by the co-researchers.

研究分野：社会言語学

キーワード：標準語　公共用語　方言　実時間　記憶時間　浜荻　共通語化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究では、公共用語という新しい視点を導入する。公共用語とは、公共場面 public space で使われる言語を指す。ハーバーマスの「公共圏」に関わる理論を背景におく。研究開始当時は清新なテーマで、先行研究も少なかったが、その後高校の新科目に「公共」が登場し、新しく確固とした位置づけを受けた。

研究技法として、社会言語学でいう High と Low のうちの High の場面を重視した分析方法を採用し、具体的には、気づかない方言や、談話としての方言差、および公共場面での方言使用などの新鮮なテーマを取り上げる。日本語方言学（および世界の方言学）の主な関心は、古来の日常の方言使用だった。すなわち High と Low のうち、Low の場面を主要な対象としてきた。しかし 21 世紀に入り、高年層も方言を保持することが少なくなり、従来型の方言調査の視野では、地域差がカバーできない。一方、High の公共的場面で使われることば（話しことばなら国会の討論、書きことばなら小説や学術論文や広告）には変異 variation がないかのように考えられている。しかし、High の場面のことばにも地域差があり、世代差・時代差がある。

本申請の代表者と一部の分担者による過去の科研プロジェクト「公共用語の地域差に関する社会言語学的総合研究（平成 25～27 年度）」「公共用語の地域差・時代差に関する社会言語学的総合研究（平成 28～令和元年度）」では、以下の事実を明らかにした。地方議会会議録の分析では、多様な言語現象の地域差が取り出された。人々が意識しない「気づかない方言」については、教育用語や食品名などで各地の言い方の地域差が明らかになった。インターネット調査により、政府や自治体のような堅苦しいサイトと、ブログ利用者のように若者の俗語のとびかうサイトを比較して、公共用語の文体差・場面差を確認した。さらに、方言景観・公共場面における意識的方言使用について大量データを集積し、広い歴史的・地理的視野に置いて分析した。方言みやげ以外に、施設、商店、街路、行事、商品などの方言ネーミング・方言景観データに加え、方言絵はがき、東日本大震災の被災地の方言使用データを分析し、方言の社会的位置を再検討した。さらに多言語使用、アルファベット使用にも着眼点を広げて、江戸時代以来、近代の歴史的動向もとらえて、長いタイムスパンの中に現代語を位置づけた。

２．研究の目的

新たな研究テーマ・領域としての公共用語の研究は、これまでの成果を発展させて統合する段階にある。本研究では、これまでに得られた成果に加えて新たにデータ収集を続け、本格的な分析を進める。現時点で観察される一見多様な現象にも、統一的原理が貫徹していることを明らかにし、言語変化の発生・伝播の過程の解明を目指す。他方で本研究はこれまでの研究の継続の面も有する。これまで続いた科研が終わるが、国立国語研究所の岡崎や鶴岡における大規模経年調査の分析は長期的に連続すべきものである。本研究はそれらの長期研究の継続という側面を持つ。

公共用語は、いわゆる標準語・共通語と同様の視点であるが、外国語を考慮に入れ、かつ言語行動をも含む点、現実の使用を考察する点、および従来の方言学・社会言語学が下 Low の場面の使用に着目するのに対して、上 High の立場から照射する点で、新しい。公共的場面でのことばには変異が無いかのように考えられていたが、地域差・世代差がある。多くは長期的な史的変化の一道程として位置付けられる。また従来の研究は、意識されにくい「下からの変化」を解明することで事足れりとしていたが、本研究では下の場面の変化が文体的に上昇して上位 High 場面、公的な公共用語として普及し、確立するまでの過程をも包含する。このように、従来は部分的・一面的にしか捉えられなかった日本語の場面差・変異の実態を、High-Low という視点から把握することで、日本語の動態を総合的に明らかにする。また、本研究では多様な分野・レベルの現象を分析対象に含む。それらは、従来、相互に関連することが気づかれていなかった、あるいはその関連性が重要視されていなかったものを含む。本研究では、こうした多様な分野・テーマの分析に対して、公共用語という共通・一貫した視点を導入する。それにより、様々なレベルでの研究成果を統合し、一見多様な現象にも統一的原理が貫徹していることを明らかにする。さらに外国語にも適用可能な視点・手法であることを海外に発信する。

３．研究の方法

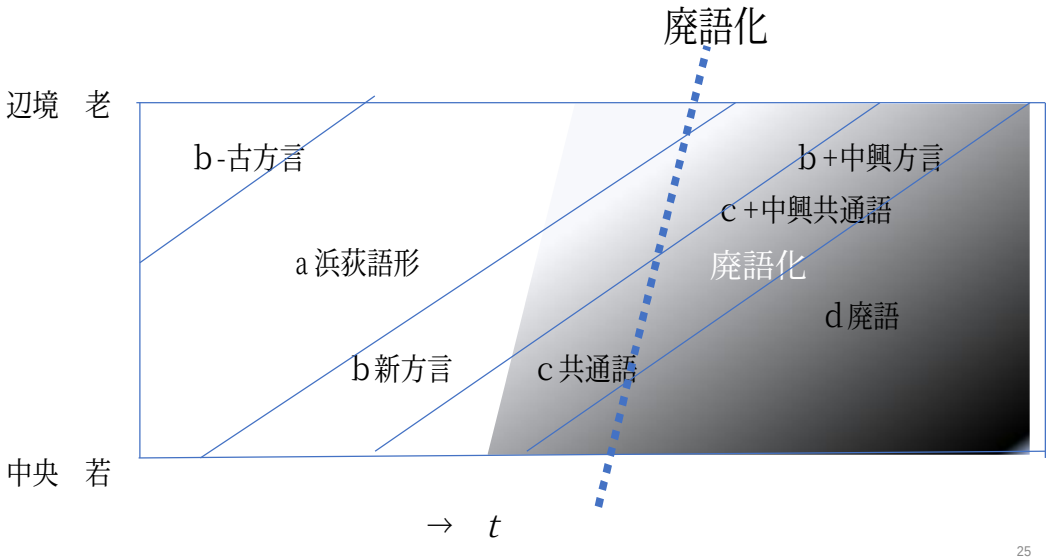
言語学の各分野における公共用語の具体的テーマを研究する。一般的な分析レベル、すなわち分析単位の長さ・要素数の異なる各レベルで分析する。**音声**については、微細な分析により、子音の調音の変化が進行中と分かった。アクセントも平板化に向かって変化を進めている。**文法**についても、ら抜き、さ入れ、助詞用法、補助動詞多用など、多くの長期的変化が進行中である。**語彙**では、標準語化とともに、外来語の増加が著しい。**敬語**は民主化・平等化に向けて着実に変化している。**談話行動**も都市化に対応した変化が進んでいる。表記については、アルファベット

が普及しつつある。
　これらの多様な変化は、一部は**下からの変化**で、従来のように日常語、方言などでも観察される変化だが、一部は**上からの変化**として、むしろ改まった場面で変化が起き、拡大している。近代以降公的場面で発生し、普及した言語現象は多い。演説・講演、公的場面の発言、マスコミのインタビューなど、個人が公的場面に登場する機会は、増大している。書きことばの面ではインターネットなどの登場により、個人が大勢に向けて発信できるようになった。
　以上の分析レベルは、分析単位の長さ、要素数にも関係するが、最近明らかになったのは、分析単位・要素数と、**習得・採用の年齢と加齢変化**の有無との関係である。研究分担者の音響分析により、日本語子音の発音（VOT）が微細な（知覚域以下の）変化を重ねており、幼時に身に付いた発音様式は個人の生涯の中で変化しないことが見出された。山形県鶴岡市の共通語化調査でも、音声・音韻については同時出生集団 cohort によって大きく支配されることが明らかになった。聴覚音声学的技法により S 字カーブを描くきれいな音変化が実証されたが、次の課題として、実験音声学的技法（VOT など）により、精細な分析を目指す。
　一方文法・語彙については思春期以降に大きく拡大し、変動する。壮年期以降も新語・新表現を取り入れる。敬語や談話パターンについては、岡崎敬語の繰り返し調査により、「**敬語の成人後採用**」が指摘された。つまり言語の分析レベル（単位の長さ）は、習得・採用の年齢と比例関係を示し、かつ加齢変化の可能性とも連動する。
　韓国語でも音韻について進行中の変化が見られ、文法の変化があり、外来語が流入して新語が生じ、さらに日本語敬語と並行的な敬語変化が観察されている。日本語の公共用語において観察される現象が汎言語的なユニバーサルな現象なのかについて、言語類型からみて日本語にきわめて近い韓国語と対照して確認する。
　日本語については戦後まもなくからの継続･繰り返し調査の結果があるので､**実時間** real time による言語変化が分析可能である。年齢という**見かけ時間** apparent time の分析も平行して行い、重層的な研究ができる。さらに**記憶時間** memory time を利用した新調査法を導入する。過去の言語使用の想起という手法で、現在の言語使用以外に、若いころの言語使用も答えてもらう。これによって個人内の言語使用の加齢変化を動態的にとらえることができる。岡崎市の敬語調査で明らかになった「敬語の成人後採用」がこの調査法によって確認できる。さらには言語変化の発生と伝播の過程が分かる。

４．研究成果

　Covid-19 のコロナ禍により、学会出張を利用した打合せ会や、現地調査がほぼ不可能になったので、リモートの学会参加や打合せを利用した。一方でそれまでに入手していたデータの分析と論文の執筆に集中できた。ことに山形県鶴岡市の江戸時代の方言集『浜荻』所載語形の追跡調査の分析が大幅に進んだ。250 年前の江戸言葉との対比を、現状と比べることにより、近代の公共場面における標準語・共通語が、どのように成立し普及したかを、精細に知ることができた。結果は CD による方言地図などの形で公開するとともに、多数の研究論文で発表し、講演や新聞などでも周知を図った。また、共同研究者により、関連する諸現象についても、着実な成果を上げることができた。科研期間終了の 2023 年 3 月以降に採択されて公開される論文も多い。さらに今後も分析を続け、成果を公開していく予定である。
　具体的には、分担者による各種の実証研究を研究業績一覧によって参照されたい。
　1　現代日本語の大きな動き
　標準語・共通語の全国普及と言う大きな流れが、言語学の各分析レベルで確認され、「雨傘モデル」に従って変化が進むことが観察された。以下の多様な変化は、一部は下からの変化で、従来のように日常語、方言などでも観察される変化だが、一部は上からの変化として、改まった場面で変化が拡大している。各地の方言（新方言）の公共場面への登場と、標準語への採用が確認された。また「気づかない方言」「気づかない変化」が音声、文法、敬語、語彙、談話パターンなど多くの面で実証された。22 世紀にかけての大きな動きとして位置付けられる。
　2　国会議会会議録・地方議会会議録
　現代の公共用語の典型としての国会議会会議録・地方議会会議録の分析により、多様な言語現象の地域差が取り出された。近代以降公的場面で発生し、普及した言語現象は多い。演説・講演、公的場面の発言、マスコミのインタビューなど、個人が公的場面に登場する機会は、増大している。書きことばの面ではインターネットなどの登場により、個人が大勢に向けて発信できるようになった。多言語使用、アルファベット使用にも広げて、江戸時代、近代の長いタイムスパンの中に現代語を位置づけた。現時点で観察される一見多様な現象にも、統一的原理が貫徹していることを明らかにした。他方で本研究はこれまでの長期研究の継続の面も有する。
　3　江戸時代以来の方言・標準語の動き
　江戸時代中期 250 年前の方言集『浜荻』は、庄内方言と江戸在勤の武士ことばを対比して記した資料である。その戦後まもなくと 21 世紀の調査の追跡という大規模調査によって、江戸ことばの二重性、つまり社会階層と場面による相違が析出された。約 400 語の 100 年以上の年齢差のデータに多変量解析を適用し、歴史社会言語学観点から計量語彙論的分析を施した。武家にふさわしい用語は、今も区別があり、標準語、公共用語として普及中で、近代語の連続性が確認され、その動きは現在に引き継がれている。一方江戸時代の生活を反映する語は、廃語になり、現代公

共用語としてふさわしい語のみが生き残ることが実証された。廃語については、付図のような図式を提示できた。



戦後まもなくからの鶴岡継続調査があるので、実時間 real time による言語変化が分析可能である。年齢という見かけ時間 apparent time の分析も行った。さらに記憶時間 memory time を利用した新調査法を導入した。想起法で、若いころの言語使用も答えてもらい、加齢変化もとらえることができる。言語変化の発生と伝播の過程が分かる。

4　「気づかない方言」「気づかない言語変化」

人々が意識しない「気づかない方言」については、教育用語（学校方言）や食品名などで各地の言い方の地域差が明らかになった。音声については、音響分析により、子音の調音の変化が進行中と分かった。アクセントも平板化に向かって変化を進めている。文法についても「ら抜き」「さ入れ」補助動詞多用など多くの変化が進行中である。語彙では、標準語化とともに、外来語の増加が著しい。敬語は民主化・平等化に向けて着実に変化している。談話行動も都市化に対応した変化が進んでいる。一方文法・語彙については壮年期以降も新語・新表現を取り入れる。敬語や談話パターンについては、敬語の成人後採用が指摘された。加齢変化とも連動する。語彙では、標準語化とともに、外来語の増加が著しい。敬語は民主化・平等化に向けて着実に変化している。談話行動も都市化に対応した変化が進んでいる。一方敬語や談話パターンについては、敬語の成人後採用が指摘された。加齢変化とも連動する。

これらの多様な変化は、一部は下からの変化で、従来のように日常語、方言などでも観察される変化だが、一部は上からの変化として、改まった場面で変化が拡大している。

5　成果の発信・公表

得られた成果とデータは、各分担者の論文・口頭発表で公にされるとともに、紙出版の困難さから、CD やインターネットで電子ファイルとして公開されている。また国際発信を心がけ、ヨーロッパの国際会議でのワークショップ、学会誌の特集、個別論文、韓国・中国の学会誌への掲載が実現した。日本語の公共用語で観察される現象がユニバーサルな現象なのか確認する。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計17件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 Hi-Gyung Byun	４．巻 25
２．論文標題 Acoustic characteristics for Japanese stops in word-initial position: VOT and post-stop fo	５．発行年 2021年
３．雑誌名 音声研究	６．最初と最後の頁 41-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24467/onseikenkyu.25.0_41	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Hi-Gyung Byun	４．巻 13(3)
２．論文標題 Perception of Japanese word-initial stops by native listeners	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Phonetics and Speech Sciences	６．最初と最後の頁 53-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.13064/KSSS.2021.13.3.053	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 邊姫京	４．巻 9
２．論文標題 ソウル方言の語中閉鎖音の知覚特性と音声指導	５．発行年 2022年
３．雑誌名 朝鮮語研究	６．最初と最後の頁 7-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50986/koreanlinguistics.9.0_7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 井上史雄・田辺和子・半沢康・山下暁美	４．巻 103
２．論文標題 「お父さん」の実時間と記憶時間―グロットグラムにおける見かけ時間の認知方言学―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東京外国語大学論集	６．最初と最後の頁 1-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 井上史雄・半沢康	4．巻 33(2)
2．論文標題 方言の地域差年齢差の多変量解析―庄内浜荻グロットグラムの多重対応分析―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 福島大学地域創造	6．最初と最後の頁 17-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Inoue Fumio & Yasushi Hanzawa	4．巻 27
2．論文標題 Multivariate Analysis of Geography and Age in Dialect Vocabulary:Comprehensive Analysis of 250 Years of Language Change	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Dialectologia:revista electronica	6．最初と最後の頁 97-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 半沢康	4．巻 33
2．論文標題 『庄内浜荻』調査データの多変量解析	5．発行年 2021年
3．雑誌名 福島大学人間発達文化学類紀要	6．最初と最後の頁 49-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 井上史雄	4．巻 5号
2．論文標題 静岡の新方言と標準語の普及過程	5．発行年 2022年
3．雑誌名 静言論叢 5号 https://shizuoka.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1453	6．最初と最後の頁 pp.1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 井上史雄	4．巻 第6巻
2．論文標題 危機言語・危機方言と経済	5．発行年 2022年
3．雑誌名 包聯群（2022）『現代中国における言語政策と言語継承』三元社。	6．最初と最後の頁 pp.1-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 井上史雄	4．巻 102
2．論文標題 文法形式の分布と距離―共通語化と鉄道・徒歩距離―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 東京外国語大学論集 http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/106514	6．最初と最後の頁 p.1 -29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/106514	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 井上史雄	4．巻 26
2．論文標題 社会言語学の盛衰	5．発行年 2021年
3．雑誌名 明海日本語	6．最初と最後の頁 pp.1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Inoue Fumio	4．巻 27
2．論文標題 Multivariate analysis of geography and age in dialect vocabulary --- Comprehensive analysis of 250 years of language change ---	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Dialectologia: revista electr?nica	6．最初と最後の頁 pp.97-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 井上史雄・半沢康	4．巻 24巻-1
2．論文標題 方言語彙残存と鉄道交通―『庄内浜荻』の方言語彙残存率―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 社会言語科学	6．最初と最後の頁 pp.141-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Inoue Fumio	4．巻 24
2．論文標題 "Dialect vocabulary changes over 140 years ---Standardization and new dialect forms observed in Hamaogi glossary ---"	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Dialectologia et Geolinguistica	6．最初と最後の頁 105-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Matsuda, Kenjiro	4．巻 10
2．論文標題 Random Effects in the Third Survey of the Okazaki Survey on Honorifics	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ICU Working papers in linguistics	6．最初と最後の頁 57-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高田三枝子	4．巻 50
2．論文標題 東北の話者における有声性に関わるパラメータの探索とその世代差	5．発行年 2020年
3．雑誌名 愛知学院大学文学部紀要	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 井上史雄	4．巻 51
2．論文標題 日韓社会言語学研究の動向と展望	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本学 The Ilbon Hak	6．最初と最後の頁 1-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計20件（うち招待講演　5件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 松本和子・高田三枝子・奥村晶子・吉田さち
2．発表標題 見かけ上の時間を用いた樺太日本語方言の変異と変化
3．学会等名 第113回日本方言研究会
4．発表年 2021年

1．発表者名 松本和子・吉田さち・高田三枝子・奥村晶子
2．発表標題 樺太日本語方言の変容―朝鮮語・ロシア語との接触の視点から―
3．学会等名 日本語学会2021年度秋季大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 高田三枝子
2．発表標題 『昭和話し言葉コーパス』における用言のアクセント－結合動詞および動詞後続形式のゆれ－
3．学会等名 シンポジウム「日常会話コーパス」VI（招待講演）
4．発表年 2021年

１．発表者名 井上史雄
２．発表標題 方言とメディアの言語的コンプレックスーー方言コンプレックスの言語的・経済的基盤ーー
３．学会等名 ひとことばフォーラム
４．発表年 2021年

１．発表者名 松田謙次郎
２．発表標題 新漢字と旧漢字が混在したテキストの形態素解析について
３．学会等名 2021年度科研プロジェクト「昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究」研究発表会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Matsuda, Kenjiro
２．発表標題 A real-time study of a verbal conjugation change in the Okazaki Survey on Honorifics data
３．学会等名 New Ways of Analyzing Variation - Asia Pacific 6 (Singapore)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 松田謙次郎
２．発表標題 回答に深く埋もれて―岡崎敬語調査におけるタリナイ/タラナイの変異―
３．学会等名 東京大学言語変異・変化研究会@駒場
４．発表年 2020年

１．発表者名 高田三枝子
２．発表標題 東北の話者における有声性に関わる音響パラメータの世代差
３．学会等名 日本音声学会第340回研究例会(大阪女学院大学)
４．発表年 2020年

１．発表者名 高田三枝子
２．発表標題 『昭和話し言葉コーパス』における用言のアクセント－結合動詞および動詞後続形式のゆれ－
３．学会等名 シンポジウム「日常会話コーパス」VI(オンライン開催)
４．発表年 2021年

１．発表者名 竹田晃子
２．発表標題 東北方言における条件表現の形式 ―近代の方言変化を読み解く―
３．学会等名 日本語文法研究のフロンティアー日本の言語・方言の対照研究を中心にー（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 田邊和子
２．発表標題 日英パラレルコーパスを利用した語彙教材作成の工夫と課題
３．学会等名 データ駆動型学習DDLを取り入れた言語教育（シンポジウム）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 鑓水兼貴
２．発表標題 2003年の日本の言語政策―国立国語研究所「自治体調査」データの公開―
３．学会等名 日本言語政策学会第22回研究大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 松田謙次郎
２．発表標題 新漢字と旧漢字が混在したテキストの形態素解析について
３．学会等名 2021年度科研プロジェクト「昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究」研究発表会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Matsuda, Kenjiro
２．発表標題 A real-time study of a verbal conjugation change in the Okazaki Survey on Honorifics data
３．学会等名 New Ways of Analyzing Variation - Asia Pacific 6 (Singapore)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 松田謙次郎
２．発表標題 回答に深く埋もれて―岡崎敬語調査におけるタリナイ/タラナイの変異―
３．学会等名 東京大学言語変異・変化研究会@駒場
４．発表年 2020年

１．発表者名 高田三枝子
２．発表標題 東北の話者における有声性に関わる音響パラメータの世代差
３．学会等名 日本音声学会第340回研究例会(大阪女学院大学)
４．発表年 2020年

１．発表者名 高田三枝子
２．発表標題 『昭和話し言葉コーパス』における用言のアクセント－結合動詞および動詞後続形式のゆれ－
３．学会等名 シンポジウム「日常会話コーパス」VI(オンライン開催)
４．発表年 2021年

１．発表者名 竹田晃子
２．発表標題 東北方言における条件表現の形式 ―近代の方言変化を読み解く―
３．学会等名 日本語文法研究のフロンティアー日本の言語・方言の対照研究を中心にー（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 田邊和子
２．発表標題 日英パラレルコーパスを利用した語彙教材作成の工夫と課題
３．学会等名 データ駆動型学習DDLを取り入れた言語教育（シンポジウム）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 鑓水兼貴
２．発表標題 2003年の日本の言語政策―国立国語研究所「自治体調査」データの公開―
３．学会等名 日本言語政策学会第22回研究大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計6件

１．著者名 Yoshiyuki Asahi, Mayumi Usami, Fumio Inoue (Eds.)	４．発行年 2022年
２．出版社 Mouton De Gruyter	５．総ページ数 669
３．書名 Handbook of Japanese Sociolinguistics	

１．著者名 竹田晃子	４．発行年 2020年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 304
３．書名 東北方言における述部文法形式	

１．著者名 大野眞男・杉本妙子・児玉　忠・小林初夫・札埜和男・佐藤髙司・加藤和夫・今村かほる・竹田晃子・小島聡子・山浦玄嗣・三樹陽介・茂手木清・金田章宏・山田敏弘・菊　秀史・中本　謙・小林　隆・内間早俊・坂喜美佳・佐藤亜実・小原雄次郎・櫛引祐希子	４．発行年 2020年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 326
３．書名 実践方言学講座2・方言の教育と継承	

1．著者名 井上文子、尾崎喜光、櫛引祐希子、熊谷智子、小林隆、佐藤亜実、椎名渉子、篠崎晃一、竹田晃子、津田智史、中西太郎、松田美香	4．発行年 2021年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 345
3．書名 全国調査による言語行動の方言学	

1．著者名 Matsuda, Kenjiro	4．発行年 2020年
2．出版社 Peter Lang	5．総ページ数 298
3．書名 Proceedings of Methods XVI: Papers from the Sixteenth International Conference on Methods in Dialect	

1．著者名 松田謙次郎	4．発行年 2021年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 272
3．書名 日本語の乱れか変化か―これまでの日本語、これからの日本語	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	阿部　新 (Abe Shin) (00526270)	東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・准教授 (12603)	
研究分担者	山下　暁美 (Yamashita Akemi) (10245029)	特定非営利活動法人社会理論・動態研究所・研究部・研究員 (95401)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	半沢　康 (Hanzawa Yasushi) (10254822)	福島大学・人間発達文化学類・教授 (11601)	
研究分担者	鑓水　兼貴 (Yarimizu Kanetaka) (20415615)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・共同利用推進センター・プロジェクト非常勤研究員 (62618)	
研究分担者	高丸　圭一 (Takamaru Keiichi) (60383121)	宇都宮共和大学・シティライフ学部・教授 (32207)	
研究分担者	邊　姫京 (Byun Hi-Gyung) (90468124)	国際教養大学・国際教養学部・准教授 (21402)	
研究分担者	久能　三枝子（高田三枝子） (Takada Mieko) (90468398)	愛知学院大学・文学部・准教授 (33902)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関